

# 中 北 海 道 現 代 俳 句 協 会

## 会 報 88号

令和2年  
4月7日発行

ある。この点を受け、事前の打ち合わせで「読みやすい、わかりやすい俳句が上位入賞しやすいのでは」という指摘があった。さらに、その根底に「鑑賞力や批評力の衰え」があるので、この

問題提起があり考えさせられた。

膨大な数の大会投句から入賞句を選ぶ際、篩の目を通り票を獲得しやすいタイプの句は確かにある。ただ、私たちの普段の句会もそれではないのか自戒したい。描写が明快で言わんとすることがわかりやすい句、体験や感覚を共有しやすい（例えば戦争や震災をテーマにしている）句、鑑賞の言葉を探しやすい句にすつと目が行きがちではないか。

「わかりやすさ」は一つの魅力ではある。問いたいのは、鑑賞者として目の前の句と十分格闘したか、一読「わかりにくい句」の見どころを見逃していないかということ。名鑑賞を得て語り継がれる難解句もある。鑑賞も作句も「わかりすぎ」に傾かず、時に「混沌」を覗き「歯ごたえ」を求める。一步先の表現の扉を開くために、挑戦する勇氣を持ちたいと思う。



「わかる」の一步先へ

瀬戸 優理子

昨年十一月開催の現代俳句全国大会では、初の試みで「受賞作トークセッション」が行われ、パネリストとして参加する機会を得た。セッションの詳細は、先の『現代俳句』二月号に掲載されたのでご覧いただければ幸いである。進行の都合上、予定時間より短い三十分の持ち時間となり「もつと語りたかった」部分が割愛となった感もあるもので、この場を借りて少し補足したい。

鑑賞の俎上に挙げたのは上位十句。一句を除きパネリスト間で読みが大きく分かれることはなかった。その一句とは「俳句のまちあらかわ賞」の「メロンに正面があり空き家が増える」（堀節誉）。詠者の感覚を前面に押し出した飛躍の大きい句で

## 令和二年度

### 総会及び新年交流会の記

菅 井 美奈子

R2・2・1  
於 すみれホテル

記録的な少雪の中、立春間近に行われた本年度の総会は、三四名の出席と議決権委員状五八名をもつて、定刻の二時にふじもりよしと事務局長の司会で始まった。

冒頭、物故者への黙祷がささげられた。続く五十嵐秀彦会長の挨拶では、現代俳句協会の今年度の目標は財務の健全化と会員数増であること、中北海道現代俳句協会の財務は皆様のご理解を得て会費の値上げを実施して安定化した、会員数の減少が課題となっているとの言葉があった。

また、昨年十二月に氷原帯が終刊になったことは誠に残念ではあるが、ひとが創ったものであるからには終わりはいつか来て、その後が大切であるとも話された。

議長に松王かをり氏が指名され議事に入った。令和元年度の事業報告、決算報告の後に齋藤雅美監査委員から、いずれも適正に処理されている旨の報告があり、加えて帳票類の

取扱いの丁寧さなど、会計担当の高島葉子氏の労をねぎらった。引き続き令和二年度の事業計画、予算案へと進み役員改選に移った。今年には役員改選の年であるが、役員全員の留任を拍手をもって承認し総会は終了した。暫時休息をはさみ、鹿岡真智子氏の巧みな司会進行で新年交流会が行われた。

会長の挨拶と乾杯に続き、「現代俳句協会全国大会毎日新聞社賞」を受賞した五十嵐秀彦会長に、青山醉鳴氏より花束の贈呈があった。さらに松山市で行われた「高校生以外のため」の裏俳句甲子園にて優勝したチーム「雪うさぎ」から、ふじもりよしと事務局長と青山醉鳴氏による、傾向と対策や対戦裏話に喝采が起こった。

最後に白井千百氏が新しい人や若い人の参加は喜ばしいことであるという締め言葉と乾杯を行い、お開きとなった。



## 令和2年度中北海道現代俳句協会 事業計画(案)

日 程	事 業 計 画	
1月25日 (土)	第20回中北海道現代俳句賞選考委員会 かでの2・7 910会議室 応募総数 24編〈栗山 麻衣氏に決定〉	組 織 活 動 部 顕 彰 係
2月1日 (土)	令和2年度定期総会及び新年交流会 14時から すみれホテル 札幌市中央区北1西2	事 務 局
4月5日 (日)  (中止)	第29回中北海道現代俳句大会 13時から ホテルサンプラザ 札幌市北区北24西5 講演：月岡 道晴氏（歌人・國學院大学北海道短期大学教授） 演題：「北海道発・現代短歌の新風」 出句締切：1月9日（木）	事 業 部
8月29日(土) 実施予定	俳句研究交流句会 北海道立文学館 当番結社：雪華	組 織 活 動 部
8月より	第21回中北海道現代俳句賞の募集 締切：12月15日	組 織 活 動 部 顕 彰 係
そ の 他	会報 第88号：4月発行 第89号：8月発行 第90号：12月発行 「一人一句集」4月発刊予定 幹事会 年6回実施予定（奇数月） 三役・顧問・中北海道現代俳句賞選者の会 年1回実施予定	広 報 部  事 務 局

4月5日（日）開催予定の第29回中北海道現代俳句大会はコロナウイルス感染予防対策として中止となりました。

### 現在の役員・幹事構成

	会 長	五十嵐 秀彦	留任						
	副 会 長	石本 雪鬼	留任						
		亀松 澄江	留任（事業部兼任）						
	事務局 長	ふじもりよしと	留任						
	監 査 員	平尾 知子	齋 藤 雅 美						
	顧 問 員	藤谷 和子	辻 脇 系 一						
	参 事 員	横山 いさを							
	幹 事 長	高 畠 葉子							
	幹 事 副 長	中 田 琢志							
	幹 事 部 長	林 冬 美	遠 藤 静 江						
	幹 事 部 副 長	金子 真理子							
	組 織 活 動 部 長	原 田 昌 克	瀬 戸 優 理 子						(顕彰)
	組 織 活 動 部 副 長	鹿 岡 真 知 子	近 藤 由 香 子						
	広 報 部 長	江 草 一 美	青 山 醉 鳴						

### 中北海道現代俳句賞選者

五十嵐 秀彦  
鈴木 きみえ  
永野 照子  
横山 いさを  
渡辺 のり子  
石川 美智子  
松 王 かをり(新)

#### 会費納入の御願い

本年度も会員の皆様  
全員、振り込みにて納  
入して頂くことになり  
ました。振込手数料も  
御負担下さいますよう  
御願い申し上げます。

# 第20回中北海道現代俳句賞受賞作品



受賞者 栗山 麻衣氏 プロフィール  
1973年 横浜市生まれ。現在、札幌市在住  
2009年 俳句愛好会「舟・天空句会」に参加  
2010年 銀化入会  
2012年 銀化新人賞受賞。銀化同人  
俳句集団【itak】参加  
2013年 第4回北斗賞次点  
2019年 北海道立文学館俳句賞 選考委員賞  
平原一良賞受賞

## 燃え残る

栗山 麻衣

燃え残る硝子の目玉鳥渡る  
落丁へ真つ逆さまに冬の午後  
銃声を枯野たちまち吸収す  
マスクして本音は顔の奥の奥  
着ぶかれて革命起こす気も失せて  
それぞれの背中それぞれおでん酒  
蜜柑剥く銃と無縁のままの指  
冬の蜂一步一步をすべとす  
海鼠へとなるつもりなど無かつたが  
雪降つて全て未踏の街となる  
鷹化して鳩となりけり臍に胡麻  
光より眩しきものに春の雪  
雨音の途切れずしづか古雛  
ぬかるんだ形に乾く春の泥  
陽炎へ百歩火宅へは一步

蓬摘む語彙を増やしてゆくやうに  
波音は昨日のつづき雁供養  
蝶死んで不意に開いたままの翅  
麦の秋なだらかに飼ふ老婆心  
釣堀へひとりの時間釣りにゆく  
広告の裏真つ白き夏野かな  
蝦夷丹生やとろりと黒き夜の海  
船旅は少し銀河へ傾ぎつつ  
生まるるは弾かるること風仙花  
葡萄には暁の蜜夜の蜜  
最初から足は棒なる案山子かな  
秋の陽を手玉に取りてアルルカン  
団栗の帽子探しといふ仕事  
鯛焼のたつぷりと腹黒きこと  
新海苔の疎にして密に艶めきぬ

# 令和元(平成31)年度 第20回 中北海道現代俳句賞一次選考結果

番号		五十嵐 秀彦	鈴木 きみえ	永野 照子	横山 いさお	渡辺 のり子	石川 美智子	松王 かをり	点数
1	野分あ と (平川 靖子)				○				1
3	夢に 鯉 (安田 中彦)						○		1
5	太陽を 掴む (原田 昌克)					○			1
7	セルロイドの風景 (ふじもりよしと)	○							1
9	アビイ・ロード (岡本 順子)			○					1
10	微熱 (大河原 倫子)		○	○			○		3
11	燃え残る (栗山 麻衣)	○	○		○	○		○	5
13	苔生す (亀松 澄江)			○	○		○	○	4
18	母の使者 (高島 葉子)	○	○			○		○	4

## 選考経過

選考委員長 永野 照子

中北海道現代俳句賞は今年節目の二十回目を迎え二十四編の応募作があった。

五回以上応募された方が七名と、会員の皆様の熱意に支えられてここまで継続出来たことはたいへん喜ばしいことである。

一次選考は書面により各委員三編を選出しその結果は別表の通りである。

二次選考は一月二十五日に各委員出席して行われたが、松王委員は都合により欠席された。

最初に各委員が自己の推薦作品三編について推薦の理由を述べ、次に一次選考作品のすべてについて意見交換があり、一点作品五編の扱いについて話し合った結果この段階で選考対象として残さないこととした。

三点以上の作品⑩微熱⑪燃え残る⑬苔生す⑱母の使者の四編を二次選考の対象とし、さらに意見交換と討議を重ねた結果⑩⑪⑱について一位三点二位二点二位一点の順位で投票して集計。「燃え残る」十三点「母の使者」十二点「微熱」十一点となった。

結果ではあったが栗山麻衣さんの「燃え残る」が全員一致で正賞に決定した。

率直な意見の交換の中で従来通り誤字や仮名遣いの誤り、自選の質や題の選定への不満などが指摘されたことを付記します。

## 選を終えて

永野 照子

正賞は栗山麻衣さんの「燃え残る」に決定した。三編のなかに推薦するか最後まで悩んだ作品であったが、選考を重ねる毎に賛同の気持が強くした。素材が新鮮とか言葉が斬新とか云うわけではなく、挑戦とかを感じさせる作品というでもないが、その分作者自身が納得するまで推敲を重ねたと思われる堅実な表現に引かれた。直接的な心情吐露の作品もあったが、提示をするだけの多くの作品に表面的な意味と隠れた意図や隠された抒情が重層的に完成されていて感心した。また程良い新鮮さも多くの共感をよぶところと思う。

蜜柑剥く銃と無縁のままの指  
陽炎へ百歩火宅へは一歩  
秋の陽を手玉に取りてアルルカン  
栗山麻衣さん、おめでとうござ  
います

一次選考で推薦した作品

⑨ アビー・ロード 岡本 順子

そつと話すふらんねる草の柔らかく  
人の日のほろほろこぼれクワツサン  
作者の体温や懐かしさが伝わり  
けれん味の無い作風と温かい読後  
感が印象に残る。

⑩ 微熱 大河原倫子

五月の橋闇の重さを撓らせる  
ちちははの容に網戸凹みをり  
対象と呼吸を合わせたバランス  
良い感覚の作品は具象性があり瑕  
疵も少なかった。

⑬ 若生す 亀松 澄江

火星にも水ある話蜜の夜  
ゆつくりと人を案内草の花  
季語の扱いや無理の無いイメー  
ジの展開などきつちりと完成され  
た作品が揃っていた。  
ほかに高島葉子さん、安田中彦  
さん、中山ヒロ子さん、平倫子さ  
ん、遠藤由紀子さんもそれぞれ心  
に残る作品であった。  
ここ数年作品傾向の変化を思っ  
ていたが今回はより大きく感じた  
ことと全体の作品を通してレベル  
の向上を感じて心強く思った。

## ハイレベルな応募作

五十嵐秀彦

今回の応募作は全体にレベルが  
高く、強く推したい作品が複数あつ  
たため悩ましかった。私が一次選  
考で選んだ三作は、「セルロイド  
の風景」「燃え残る」「母の使者」。  
「セルロイドの風景」では「念  
仏にすこし足りないソーダ水」な  
ど本来アンマッチなものを違和感  
なく句にできている感性に注目し  
た。「燃え残る」は平易な言葉を  
使いながら、個性的な着眼点を巧  
みに句と成している点で最も安定  
した作品となっていた。「陽炎へ  
百歩火宅へは一步」〈釣堀へひと  
りの時間釣りにゆく〉〈困栗の帽  
子探しといふ仕事〉など秀句が多  
かった。「母の使者」は、看取り  
をテーマとした連作で、このアプ  
ローチは難しく、中を読み込むま  
では失敗を予感させたが、一句一  
句当たってみてその先入観は気持  
ちよく見事に裏切られた。静かな  
空気感の中にドキリとさせられる  
句が並んでいたのだ。〈肝性脳症  
肝性脳症言ひ聞かせ涅槃西風〉  
〈母の日の母は降板すると言う〉  
〈秋果剥く昨日舌骨拾った手〉  
〈遺言の片隅大根干す日和〉など、  
テーマに安易に流されることなく、

一句をしつかり立たせている。

選考会ではこの三作中、「燃え  
残る」と「母の使者」が残り、さ  
らに「微熱」が加わって、デッド  
ヒートとなった。「微熱」にも〈曼  
珠沙華あまた抱へてより微熱〉  
〈鮭遼上路面電車の混み合へる〉  
など秀句が揃っていた。この三作  
品がもつれながら投票による最終  
選考となったのは当然だっただろ  
う。

結果は一点差で「燃え残る」が  
受賞と決まる劇的な展開となり、  
選考のむずかしさというものをそ  
の場にいた全員が感じざるを得な  
かった。三作ともに授賞に値する  
作品だったからである。

「燃え残る」の作者は栗山麻衣  
さん。「銀化」所属の気鋭の作家  
である。俳句文芸の新しい風を体  
現するかのような作風に、これか  
らのますますの活躍を期待したい。

## 選考を終えて

石川美智子

応募作品二十四編の熱気に圧倒  
される。

佳句が分散し選に苦労した。私  
の中での優先順位を選評したい。

⑩ 微熱 大河原倫子

巴里祭サラダへ箸も添へてあり  
鱗雲書き遺すこと書かぬこと  
ものみな影ととのへる深雪晴

感情の振幅の広さが句を創る。  
表現そのものは淡々としているが  
奥が深い。

孤高を守る作者が立っている。

⑬ 苔生す

亀松 澄江

貴方がいてあなたがいないたんぽぽ野  
ゆつくりと人を案内草の花  
歯学部へ落ちて踏まれて銀杏で

ゆつたりと事象に向かいゆつたりと詠む。窮屈さを感じない。季語の幹旋等、俳句の骨法に則って揺るぎがない。難を言えば句から受ける優しさだろうか。贅沢な話ではある。

③ 夢に鯉

安田 中彦

毀れゆく母をげんげに眠らす  
箱庭の白い王領いつも晴れ  
思はずに泣きゑて遺憾龍の玉

感情の起状の激しい句群と一読。その意味で統一感はないが句の底に流れる作者の「もがき」がヒリヒリと伝わる。

次に注目をした作品を挙げたい。

⑤ 太陽を掴む

原田 昌克

寒戻る私は朝からナポリタン  
気が付けば私が秋になっていた

一句一句は魅力。ただ内省的な句が多く、息苦しさを感じる。「私」からの脱却か。

⑪ 燃え残る

栗山 麻衣

着ぶくれて革命起こす気も失せて  
陽炎へ百歩火宅へは一步

斜に構え溺れず詠む。乾いた感性に共鳴しきりであるが、それだけに反発もあった。選考の軸を存分に揺らして頂いた。

栗山麻衣氏の今回の受賞を心よりお祝い申し上げます。

挑戦を

鈴木きみえ

応募作品二四篇、昨年より三篇少ないが全体的に作品のレベルが高かった様に思う。予選から最終選考迄ずっと次の三篇を押しした。

⑪ 燃え残る

栗山 麻衣

着ぶくれて革命起こす気も失せて  
鷹化して鳩となりけり臍に胡麻  
秋の陽を手玉に取りてアルカン

右の一連には最初から注目をした。新鮮な句のスタイル、さらり

とした表出は、一句一句をふくらませ共感を覚えた。右の一句目の奥深さ、二句目、三句目のさりげないスパイスの様な俳味に惹かれた。三度目の挑戦でこの賞に輝いた作者にお祝いを申し上げ、ますますのご活躍をお祈りする。

⑱ 母の使者

高畠 葉子

失禁の母の見上げる初桜  
夫いまを逃れるように遠花火  
退院は裏口月光を浴びて

母の死と向きあつての一連に、かつて自分の母の最後が重なった。身内を詠んだ句に佳句は少ないと言われているが、この一連は淡淡と表出していて、一句一句にもテーマがあり意とするところがより伝わる。来年を期待したい。

⑩ 微熱

大河原倫子

巴里祭サラダへ箸も添へてあり  
ちちははの容に網戸凹みを取り  
螢火を揺らせし浮世草紙かな

日常の生活の中から右の様な佳句が生れている。押しつけのない表出、詩情豊かな一連に惹かれた。来年も前向きな挑戦を望みたい。

⑬ 苔生す

亀松 澄江

火星にも水ある話蜚の夜

シヤクシヤインロード幾度も星流れ

②② アマゾンで釣れ 石井 美髯

しづやしづ問ひの届かぬ蓮華の夜  
整も修治も喰ふ側の人鱈場蟹

右の二人の一連も心に残った。

三〇句揃えるのは至難の業とも  
思うが……。多くの会員の挑戦を期  
待している。

## 選考所感

松王かをり

今回から選考委員ということも  
あり、緊張して応募作品二四編と  
向き合った。どの作品からも、作  
者の熱い思いが伝わってきた。ま  
ずは、応募して下さったみなさん  
にお礼を申し上げたい。

一次選考は順位無しで⑪⑬⑱の  
三編を選んだ。が、二次選考の日  
に父が亡くなるという思わぬ事態  
となり、「一次選考で選んだどの  
作品に決まっても異存はない」と  
お伝えして欠席。後で⑪「燃え残  
る」が受賞作と決まったことを聞  
いた。

栗山麻衣さん、本当におめでと  
うございます。そして後の二編も  
それに匹敵する作品であったこと  
を述べておきたい。

⑪「燃え残る」 栗山 麻衣

燃え残る硝子の目玉鳥渡る  
銃声を枯野たちまち吸収す  
蜜柑剥く銃と無縁のままの指

燃え残った人形の「目玉」と、  
「鳥渡る」との取り合わせが絶妙。

「銃声が消えた」ことを、「枯野  
が吸収した」と捉えた感覚がとて  
もいい。銃と無関係でいられる幸  
せを、「蜜柑剥く指」に語らせた  
巧みさ。シリアスな句だけでなく  
〈鯛焼のたつぷりと腹黒きこと〉  
のような諧謔の句もあり、バラエ  
ティーに富んだ三〇句であった。

⑬ 苔生す 亀松 澄江

臘夜の扉ひとつが閉まらない  
火星にも水ある話堂の夜  
やがて苔生す二百十日のさざれ石

「臘夜の」や「火星にも」のよ  
うに、物語性のある句が魅力的。  
また「君が代」を下敷きにした  
「やがて苔生す」の句のように、  
パロディを一句にする勇氣に感服。

⑱ 「母の使者」 高島 葉子

退院は裏口月光を浴びて  
秋果剥く昨日舌骨拾った手  
引き継いだ未完の刺繡小鳥来る

「母の死」をテーマにした三〇

句。こういう場合、ともすれば安  
易な情や類想に流されがちである  
が、それぞれの句に独自の視点が  
あり、作者の力量を感じた。

## 三十句の勝負

横山いさを

今回の応募は二十四作品。この  
数年程は新顔や応募回数比較的  
少ない方が増え、多彩な作品に接  
することができて選考者冥利に尽  
きると感じている。が、複数点を  
集めたのは四作品というのは意外  
だった。

栗山 麻衣

燃え残る硝子の目玉鳥渡る  
着ぶくれて革大砲起す気も失せて  
陽炎へ百歩火宅へは一步

釣堀へひとりの時間釣りにゆく  
鯛焼のたつぷりと腹黒きこと  
伝統的な表記と斬新な発想とい  
う現俳協のよさが存分に堪能でき  
る作品群として突出している。

亀松 澄江

父に会う鍵握りしめ海市まで  
ゆつくりと人を案内草の花  
水底を泳ぎきったる鮭の鼻  
枯菊に昨日の海の色あり



くつきり」と印象鮮明な句柄に惹かれる。それだけに「苔生す」の表題は損をしているのかなあ。

平川 靖子  
石狩番屋壁に魚拓の涼しかり  
母性愛月はフジタの猫照らす

「野分あとぼつと日の指すわが余生」など、三十句がこの表題に適っている。

三十句を通して選考者を領かせるといふ密度が結果に出るのかなあと愚考している。

高島 葉子  
母の日の母は降板すると言う  
夫いまを逃れるように遠花火  
天高く父なりたての寡夫暮し

身につまされる境涯性の強い句柄。なぜか、一読目に目に入ってこなかったが。

石井 美髯  
いかに温暖化だからとて  
アマゾンで釣れ熱帯魚

整も修司も喰ふ側の人鱈場蟹  
初冬の象に答へを訊きに行く  
四人目に推している句柄。

選考委員の七名から複数点を得た作品は僅か四作品。この選考にはお互い納得できたと思うが、一点というのも五作品あり、相互の

読みに刺激される一面もあった。最後は「燃え残る」と「母の使者」の一騎打ちとなり、「燃え残る」の栗山麻衣さんに受賞が決まったことに納得している。紙一重の差というのは何だという疑問は残っているが。

## 対象を一度

### 突き放すということ

#### 渡辺のり子

事実の報告を離れ、個人的体験を普遍化し、私たちは自分の俳句を深化させていきたい。

#### ⑪ 「燃え残る」

栗山 麻衣

陽炎へ百歩火宅へは一步  
新海苔の疎にして密に艶めきぬ  
着ぶかれて革命起こす気も失せて  
鯛焼のたつぷりと腹黒きこと  
麦の秋ならかに飼ふ老婆心  
釣堀へひとりの時間釣りにゆく

「火宅」は此処。一步の距離。

作者は火宅という対象を一度突き放し、「陽炎」に目を向ける。火宅と陽炎を再び対象として詠うことにより、火宅もいつか陽炎のように消え、穏やかな家になるだろうという詩的昇華に成功した。対象を一度突き放し、心情、心象を

加えた上で作品にするという手法が見事であった。受賞作品にふさわしいと思う。

この他、次の作品群にも共鳴句が多かった。

#### ⑫ 「母の使者」

高島 葉子

失禁の母の見上げる初桜  
愛おしむ余命ひと匙水ようかん  
浮くたましい沈むたましい鉄線花  
秋果剥く昨日舌骨拾った手

「失禁の母」という辛い現実を一度突き放し、作者の心情、心象を踏まえて「初桜」と表現した。これから咲き誇る初桜により作者の悲しみはほつと薄らいだことだろう。

#### ⑬ 「微熱」

大河原倫子

万葉人の滞空時間鬼やんま  
透明の傘と秋思の交差点  
開けてある極の小窓冬銀河  
鬼やんまの滞空する様子から、時を超えて万葉人への連想。共感できる普遍性がある。

#### ⑭ 「太陽を掴む」

原田 昌克

噴水のとっぺん死に方を考える  
薔薇の花人間が蜜吸いにくる

#### ⑮ 「野分あと」

平川 靖子

翼なく落つる他なき栗を剥く

礎

島 恒人

略歴 T13(日)12釧路生まれ。「春燈」  
「緋鮒吟社」「雲母」に属し、戦後  
「水下魚」では終刊まで編集同人。  
「秋」同人。「国鉄北海道文学」創  
刊発行。句集「風騷集」は北海道新  
聞社賞受賞。共著に「札幌の俳句」  
「札幌の歳時記」など。北海道文学  
館常任理事。

鉄灼いて雪野の工場焔をはなつ  
極月の夜の群衆として歩く  
筒鳥の遠巻き刑務所より神父  
夫婦とは海に濃くなる烏賊灯とも  
海あかるくてサルビヤの流人基地

齋藤雅美氏 抄出

〔青のフロント〕 佳句抜粋

咳一つ武漢三鎮五里霧中 高野 次郎  
重力の尾骨が軋む結氷期 高橋あや子  
厳冬に両手を挙げるグリコかな ふじもりよしと  
冬日さす浄めし後の洗濯機 柳谷 和江  
加湿器は太陽の色冬日和 村上 海斗

幹 事 会 報 告

R元.11.21(木)18時 かでる2・7 530号室  
議題

- 1 俳句研究交流会結果報告(組織活動部)
  - ・概ね良好 横断幕が好評。会場費が高いとの声も
  - ・次年度の会場選定について
- 2 令2年度総会及び新年会について(事務局)
  - ・日時 令2.2.1(土)14時 会場 すみれホテル
  - ・会費 5,000円
  - ・全国大会上位入賞五十嵐氏へ花束贈呈
  - ・他大会での動静により追加
  - ・案内状 12月上旬送付 1/13項締切
  - ・一人一句集の投句もかねる
  - ・総会資料作成 決算・予算書高島 事業関係ふじもり
- 3 中北海道現代俳句大会(事業部)
  - ・日時 R2.4.5(日) 会場 ホテルサンプラザ
  - ・大会参加費 1,000円 懇親会会費 6,000円
  - ・投句締切 1/9
- 4 中北海道現代俳句賞(組織活動部)
  - ・応募状況 現在 2篇
  - ・締切 12/15
  - ・選考委員会 1/25(土) 会場かでる2・7
  - ・選考委員 辻脇氏の辞意意向を受け新選考委員の選定
- 5 三役・顧問・選者の会(事務局)
  - ・10月20日 開催 新選考委員として松王かをり氏決定
- 6 会報 No87(広報部)
  - ・12月3日発行
  - ・中現俳賞の応募用紙再度同封
- 7 その他
  - ・本部から令和元年度俳句大会の報告
  - ・かでる2F 大型ロッカー利用の件 月770円
  - ・令和2年度北海道現代俳句大会(函館)選者の件
  - ・ゼロ句会報告 高校生、大学生等8名参加

出席者(五十嵐・石本・亀松・江草・林・遠藤・高島・青山・瀬戸・ふじもり・金子・近藤・原田・鹿岡 以上14名)

R2.1.16(木)18時 かでる2・7 503号室  
議題

- 1 年度総会議案及び新年交流会について(事務局)
  - ・日時 令和2.2.1(土)14時
  - ・会場 すみれホテル
  - ・会費 5,000円
  - ・総会資料の確認 当日の役割分担→事務局一任
  - ・幹事集合13時 受付開始13:30
- 2 中北海道現代俳句賞(組織活動部)
  - ・応募総数 24篇
  - ・選考委員会 1/25 9時 会場かでる2・7 910
  - ・選考委員 五十嵐・石川・鈴木・永野・松王・横山・渡辺
- 3 「一人一句集」2020年度(広報部)
  - ・原稿作成 青山 会報88号に同封
  - ・校正 江草・青山・ふじもり
  - ・印刷・製本 4月上旬 会場かでる2・7
- 4 会報 No88(広報部)
  - ・発行予定 4月上旬
  - ・巻頭言 瀬戸優理子、総会・新年会記 菅井美奈子
- 5 第29回中北海道現代俳句大会(事業部)
  - ・日時 令2.4.5(日)13時
  - ・会場 ホテルサンプラザ
  - ・大会費 1,000円 懇親会会費 6,000円
  - ・投句数今のところ 428句
  - ・講演 「北海道発・現代短歌の新風」  
月岡道晴氏(國學院大学北海道短期大学部教授)
- 6 第29回北海道現代俳句大会(事務局)
  - ・主管 南北海道
  - ・日時 令2.6.14(日)
  - ・会場 ホテル・リソル函館
  - ・講演 中村和弘

出席者(五十嵐・江草・林・鹿岡・遠藤・高島・青山・瀬戸・中田・金子・近藤・ふじもり 以上13名)

## 第29回北海道現代俳句大会のご案内

- 1 日時・場所 令和2年6月14日(日)午後2時  
ホテルリソル函館 函館市若松町6-8  
電話 0138-23-9269 (函館駅から徒歩5分)
- 2 特別講師 現代俳句協会会長 中村和弘氏
- 3 講評 特別選者・各地区代表選者
- 4 投句受付終了
- 5 参加費 1,000円(大会当日会場にて徴収いたします)
- 6 懇親会 大会に引き続き同会場 午後5時  
会費 5,000円 当日受付にて

※懇親会出席を取り消される場合は、3日前までに懇親会担当白井雅女(0138-23-3011)までご連絡下さい。  
(連絡なく欠席された場合は、会費を徴収いたします)

### 会員動向

会員数 125名  
(令和2年2月29日現在)

### 「青のフロント」句会のご案内

日時 偶数月第2土曜日13~16時  
場所 かでる2・7  
席題 1句 当季雑詠2~3句  
問い合わせ先 (011)852-7014 五十嵐秀彦

### 「中北海道ゼロ句会」のご案内

不定期開催(年間3回程度)  
問合先 音無早矢・村上海斗  
ngh\_zero\_kukai@outlook.jp

発行人 五十嵐 秀彦

発行所 中北海道現代俳句協会

〒064-0952 TEL 011-641-1007  
札幌市中央区宮の森2条8丁目1-18  
ふじもりよしと方

編集人 江草 一美

〒003-0838 TEL 011-844-3049  
札幌市白石区北郷8条3丁目  
6-36-703

青山 酔鳴

〒061-1354 TEL 090-3398-3457  
恵庭市島松旭町4丁目9-1 早川方

二月一日の総会・新年交流会は無事終了いたしました。前年度の事業報告・決算・本年度の事業計画・予算の承認を得、隔年の役員改選も、会長・副会長・事務局長とともに留任をご承認いただきました。引き続き協会の運営に努力いたします。かでの室料の値上げをはじめ諸経費が高騰する中、前年度の会費値上げや大参加者数・中規俳賞応募数の増加などで、本年度予算がなんとか確保出来ました。皆様のご協力に心より感謝いたします。

すでにご承知のように、新型コロナウイルスの影響で例年通りの会の運営が難しい状態となっております。過日葉書でご案内の通り、四月五日の中北海道現代俳句大会の開催は中止といたしました。大会句ご応募の皆様へは作品集より、各賞受賞の皆様へは賞状、受賞記念品を事業部よりお送りし、結果発表に替えて頂きました。何卒ご了承ください。またこの会報で発表の、中北海道現代俳句賞を受賞された栗山麻衣氏への顕彰は、八月開催の俳句研究交流句会の席で行う予定です。今号の発送には一人一句集を同封いたしました。折からの緊急事態宣言の中、大会の準備から中止に奔走された事業部と、編集業務に携わった広報部諸氏に感謝いたします。

何かと気ぜわしい毎日ですが皆様のご健康を心よりお祈り申し上げます。(ふじもり)

### ◆事務局たより

### 編集後記

中北海道ゼロ句会は十一月に北大吟行句会を開催。学生の他、月岡教授等も参加され、充実の句座に。三月はコロナ予防で中止となったが採用の「夏雲システム」がネット環境での句座を可能に。世話人は活動のヒントを多く得たようで今後が楽しみ。若年層・初心者が王対象だが、ご興味があればどなたでも世話人の別記メールにご連絡を。(酔鳴)

「牧場の片々」から草萌ゆる。(鈴木牛後)。「これから」を読んだ時、高校の頃東原三の詩に出会った時の思いと重なった。雅な言葉と、た教科書の詩とは違い、身近な風土を自分の言葉で生活を諷もど上げ、道産子の句集として読み継がれて欲しいものである。さて、北海道もそろそろ春。片々端からの草萌、一斉に咲く辛夷・連翹・梅・桜。そんな花々のパワーでコロナウイルスを一掃して欲しい。(江草)